

<内堀基光「民族集団の生成・境界・消滅」講演>

司会 後半の部を始めます。最初は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授の内堀基光先生に「民族集団の生成・境界・消滅」というテーマでお願いをいたします。よろしくお願ひいたします。

内堀基光（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授） 通称A A研の内堀でございます。

お休み前のお二方の先生のご発表が政治、経済とまいりましたので、当然ここは受けるものとしては文化ということになろうかと思ひます。私の後には生態・自然の先生が控えておりますので、ちょうど附置研の一部の4研究所の発表としては、政治、経済、文化、自然・生態ときれいな仕掛けができていると、発表者の一人としてもいたく感じ入った次第です。（スライド1）

民族集団の生成・境界・消滅 民族学(人類学)からのアプローチ

東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所
内堀基光

私が話そうとしていることは基本的には文化の問題なんですけれども、あまり文化の実相と申しますか具体相についてはお話しすることはできません。ここでは文化が使われる一つの大きな政治的な道具性といひますが、そういうものとしては、民族を分けるその分け方のモーメントとしての文化ということはよく指摘されるわけなんですけれども、それでは実際、文化というものと民族というものは実際どようにかかわっているのか、あるいは民族というものが、実は我々が日常言語で使っているときの民族というその意味論的な広がりやどれだけこの世界を人文科学的にそれなりに理論的に見ていく場合に役に立つ代物なのか、そういうことをやや理屈をこねながら眺めていきたいと思います。

ここで私はみずからを民族学者と規定いたします。民族学の立場から民族集団を見る視点でございますけれども、これは明らかに歴史学あるいは政治学、社会学の視点とは大きく異なると申ひます。同じところももちろん多々あるわけなんですけれども、ここで

は同じというよりも異なる点に強調点を置いてお話ししたいと思います。

あらかじめまとめておきますと、民族学、あるいは今の言い方ですと文化人類学という言い方が一般的かもしれませんが、これは、例えば歴史学とは時代性と出来事というものからの距離のとり方において大きく異なる。政治学あるいは社会学とは、権力関係あるいは個々の動作主、これはアクターといってもよろしいかと思いますが、単複の個人あるいは集団の位置づけ方において異なっております。歴史学のように、出来事と動作主、そのようなものに力点を置く見方からすれば、民族学の見方はどちらかというところ漫画的に見えるかもしれません。ですが漫画は漫画なりに、特有の鳥瞰といいますが距離を大きくとった見方というものがございませぬ。ふだんは人類学者というのは地べたをはい回っているように見えるわけですが、こうした地べたをはい回る民族学者にも意外と地域の研究という枠組みから飛び出た、地べたからとの対比で言えば天空に駆け上るようなそうした鳥瞰の飛躍がございませぬ。鳥瞰の高さがどの程度まで上れるかということにもよるわけですが、基本的に民族学者あるいは人類学者の仕事のエッセンスというのは、我が尊敬すべきレヴィ＝ストロースの名を引くまでもなく、超ミクロと超マクロのとてつもないぞくぞくするような乖離、離れたところとございませぬ。これが恐らく文化人類学というものを大変いかがわしい学問のように見せているところかと思ひますが、本人たちにとってはこのいかがわしさこそが魅力なので、きょうお話しすることもこうしたこととの関連でお許しいただきたいところであります。

それでは、本題に入ります。(スライド2)

エスノジェネシス:境界生成

境界生成の動機

差異化の必要性

境界生成の形式

「名付け」と「名乗り」

境界生成の内容

「区切り」と「位取り」

民族集団の生成・境界・消滅というこの三つの契機を主題として並べましたが、正確に申し上げれば、これは民族集団の生成・境界・消滅というものではなくて、民族的「境界」あるいは「境界線」の生成・維持・消滅という三つの契機というべきだと思われませぬ。この境界は特定の時空間における全体社会の中間レベルにおける範疇を形づくって

おります。これらの契機からなる全過程が、私が使うところのエスノジェネシスという言葉です。この言葉は、大変わかりやすいかと思えますけれども、エスノス、つまりギリシャ語で民族を指した言葉、それからジェネシス、生成過程、これの合成語でありまして、ロシアの民族学では比較的昔から使われてきた言葉だと思われます。英米系の人類学では余りこの言葉は使われておりません。

このエスノジェネシスの3契機を、それぞれにおいて動機と形式と内容、この三つの側面で見えていくことができるだろうと思います。相当形式論になりますけれども、例えばエスノジェネシスの第1の契機、つまり生成面あるいは境界生成に関していえば、その動機としては何らかの差異化の必要性というものがある。これは必ずしも個人のアクターないしエージェントの動機を意味しているものではありません。ある全体社会におけるダイナミックスの動機と言われるものです。さらに、そうした動機に基づいて生成される民族集団、民族集団の境界というものはどのようにして成り立つか。形式的には、外からある集団のようなものに対して名をつけること。さらには、その集団の内部から、その名を受けるとか、あるいはみずからの別の名前を使ってもいいわけですが、みずからがみずからであると名乗り出すことです。これが形式面です。そしてさらに、その境界生成の形式を受けた内容としては、ここでは「区切り」と「位取り」という言い方をしました。区切りというのは、基本的に差異化によって目指すところが分類であるということ、つまり私は何であり彼らは何であるということの名目レベルで区切っていくことです。位取りというのは、そうした区切り間にある種の hierarchy を設けること。つまり、私が一番上にいるとしますと、私どもがその区切りの、単にマトリックス的な区切りではなくて、同心円的な区切りの中間にいる、あるいはピラミダルな構成の中軸ないし頂点にいる。そこからほかの集団を、外に、あるいは下に位置づけていくということです。このようなものが境界生成の内容の一つのあり方として考えられるわけです。

エスノジェネシス:境界維持

境界維持の動機	「(全体的社会的)道具性」と 「源初的紐帯」
境界維持の形式	「分化」(細分化?)と「強化」
境界維持の内容	競争、分業、共生、 位階的均衡

こうして生成された境界というものは、当然維持されなければいけません。(スライド 3)そしてこの維持こそが、恐らく私どもがアジアであれアフリカであれ現在見ているほとんどの状態といえますが、ノーマルな状態、一般的という意味でのノーマルな状態だろうと思います。もっとも、このシンポジウムの題である「アジアを地域研究する」ということからいたしますれば、恐らくアフリカにおけるエスノジェネシスのあり方とアジアにおけるエスノジェネシス、とりわけ私の対象としている東南アジアにおけるエスノジェネシスのあり方には違いがあると思います。これについては後で若干申し述べることになります。

この境界維持の局面におけるエスノジェネシスは、よく民族関係論ないしエスニシティ論で言われることに関連しています。すなわち、エスニックグループ、民族集団が存立するのは一体道具的に存立するのか、つまりそれを名乗る人々にとって何かの役に立つから存続・存立しているのか、あるいは、何かその集団に原初的な愛着なり、人々の間の結びつきがあるから存続するのかというような議論ですが、このことは、この境界維持の動機という側面、その局面でのみ問題になることであります。ですから、しばしば言われるように、道具性と原初的紐帯の対立というようなことをもってエスニシティ論の中心的問題とするのは恐らく極めて限られた見方であろうと思います。といいますが、限定された問題意識であろうと思います。

境界維持の形式としては、境界の分化といいますが細分化と、境界の強化ということがまず考えられるわけです。スライドにはそう書いてあります。けれども、実は後からちょっとしまったなと思いました。分化というのは恐らくここに入れるべきではなくて、境界維持の形式というのは恐らく強化のあり方だけで考えるべきものだろうと思われまます。分化ないし細分化というものは、それが平面的に行われようと垂直的に行われようと、それが起きる場合には新たなエスノジェネシスの生成局面が起きてきたと見るべきであって、境界維持の局面で考えるべきではない。ちょっと筆が滑りましたので、この分化のところは括弧に入れておいていただきたいと思えます。

次に、境界維持の内容でございます。維持された境界線の内側と外側で、あるいはAという側とBという側で何が起きているのか、それに関わるのが内容というものです。非常にわかりやすい例をとりますと、民族集団間の競争、基本的には資源をめぐるアクセスの競争というものが起きます。後でお話ししますが、ボルネオという島の中では、例えば農耕民同士の間、多くは焼畑の移動耕作民ですがけれども、その農耕民同士の間での土地をめぐる競争というものが確かに存在します。あるいは、同じ土地あるいは大地にあって、異なる利用の仕方をする人々、例えば農耕民と狩猟採集民の間にも一種の競争というものが起きてくるわけです。あるいは場合によっては、競争ではなくてやや平和的な分業、あるいはその分業に基づく共生、つまりお互いにお互い同士を役に立て合っていくという形のものですが、こうした分業と共生という内容の境界維持もあり得る。さらに、分業・共生の一種の特殊形態においては位階的均衡というのがございます。これは先ほどの境界生成のところでも述べた位取りに対応するものですがけれども、その位取りの中でピラミダルな、位階的な構造が一定の均衡を保つということもあります。

エスノジェネシス:境界消滅

境界消滅の動機	交通、枯渇、暴力
境界消滅の形式	統合(差異の無化)、 deprivation
境界消滅の内容	個体の消滅、忘却

最後の局面として考えるのは、エスノジェネシスで普通には議論されないものであります。といいますのも、エスニシティの議論というのは大体境界維持をめぐる議論ですので、この最後の境界消滅のところまでは議論されないことが多いのです。ですが、当然ジェネシス全体を見るときにはこの消滅というのは非常に大きな意味を持つてくると思われまます。(スライド4)まず消滅の動機ですが、一つは、ここはちょっと言葉遣いが拙いのですが、交通の増大。民族間交通の増大によるところの境界の意味の劣化といいますが、意味が薄くなっていくことです。さらには、ある集団とされていたものの人的な、あるいはさまざまな何らかのエネルギーの枯渇。これには当然人口論的要素が入ってまいります。さらには、ジェノサイドまで含むところの暴力的契機。これはもちろん外からある集団に対して行われる契機になります。

境界の消滅の形式としては、当たり前のことですが、何らかの差異の無化による境界が消滅して統合されるというあり方があります。さらには、これは基本的には今述べた枯渇と暴力という動機に関係してくることですが、うまく日本語で言えなかったのでこのまま英語にしておきますと、deprivation が起きる、ということです。つまり、資源へのアクセスができなくなる、資源が取られる、人間が殺される等々です。これには大きな文脈では奴隷制の問題まで含まれます。奴隷制の問題はアフリカ大陸においては過去から非常に大きな問題ですが、東南アジアにおいても局所的には歴史世界の中で何度も奴隷化という問題は生じてきました。こうしたことが最終的には境界消滅の内容につながります。究極のところでの境界消滅の内容は個体の消滅にもとづきます。あるエスニックなグループに属すると自他ともに認める個体というものがこの世からいなくなる、さらには、そうしてかつてあったということさえ忘れ去られること。こうしたことが内容になります。

私が今まで述べたことは大変な形式論なんですけれども、実はこうした形式論からい

いますと、ほかの分野の方はぎょっと思われるかもしれませんが、カーストであるとかあるいはトーテム集団であるとか、そうしたものと民族集団と呼ばれているものの違いは一体どこにあるのかということがわからなくなる。全体社会の中の間レベルにおける分類範疇であるという非常に抽象的なところでは、トーテム集団もあるいはカーストもほとんど変わるところがないわけです。事実、人類学者の中には「トーテムとエスニシティ」というような論文を書いた人もいます。私の記憶に間違いがなければ、レヴィ＝ストロースも『野生の思考』の中で既にトーテム集団とエスニシティについての類似性というものを指摘していたと思います。

誤解を恐れずに言えば、この類似性というのは非常に重要なことであります。逆に見れば、今のグローバルな地球社会の中でどのような形でもあれ民族と呼ばれているものが、例えばオーストラリア原住民全体社会におけるトーテム集団と形式論理的には変わらないということの意味を考えることができる。あるいは、現在の世界における民族間位階、*hierarchy* というのが仮にあるとすれば、それはインドの諸社会に見られたカースト間の *hierarchical* な分業に基づく分類体系と論理的には変わらないと言いたくなります。ただし、恐らくこう言いきってしまったのでは完全に正しいことではなくて、恐らく違いは一つだけある。それはシステムの度合いに関わることです。トーテム集団であるとかあるいはカースト的な *classification* というのは、そのシステムの中の一つを欠くとシステム自体が非常に大きく変わる。トーテム集団システムの中の一つのトーテム集団が人口的な理由からなくなるということは、これはもう歴史的に幾らでもあったことです。あるいはカースト集団システムにおいても、さまざまなその中での分化、*differentiation* が起きて、歴史的にカースト体系というのはどんどん変わってまいります。ただし、非常に大きな抽象的なシステムとしては、このカーストシステム、トーテムシステムというのは微動だにしないように見える。それに対して、民族分類というのはことによると大きな変動が起きるのかもしれない。この辺について私は本当には考えを詰めておりませんが、何かそうしたシステムの中の一つの元としてのあり方として、民族集団というのはカーストのようなものあるいはトーテムのようなものとは異なるのではないかという予感を持っております。

あるいは逆に、今述べたのと全く逆の論理、全然違う考え方になりますけれども、民族間システムというのも、それが仮にシステムであるとすれば、その中の一つのものがなくなったとしても、民族間システムそのものは存立するのかもしれない。しかしその場合には、恐らく民族の分化であるとか、なくなりつけ加わるというそうした過程を通じて歴史的に無限に開かれたシステムになっているだろう。こうした無限に開かれたシステムというのは、トーテムシステムであるとかあるいはカーストシステムのような閉ざされたシステムではあり得ない。あるいは、そうなるともはやシステムと言うべきではないかもしれません。アフリカをやっている人類学者の中では、よくエスノシステムという言葉を使う人がいます。エスノシステム、文字どおり民族システム、複数からなる民族のシステムなのですが、これは、境界維持のレベル・局面ではいかにもシステムをなしているように見えるのですけれども、その消滅・生成の両極端の面を考えれば、本来システムという言葉からは相当遠いものであると思います。その意味では、エスノシステムというのはかなりミスリーディングな言葉であろうかと思えます。

ここで、アフリカのことにちょっと言及いたしましたので、アジア、特に島嶼部東南アジアとアフリカの民族集団の関係がどのように違うかということに触れたいと思います。恐らく現在においてもアフリカ各地、とりわけ東アフリカ、大地溝帯あたりの民族集団というのはまさにエスノジェネシスの激しい過程にある。どんどん新しい民族が少なくともこの150年程度の過程では、生まれ、なくなり、統合されているように見える。その結果、例えばAという民族集団とBという民族集団の間に同じクランが存在する。クランというのは氏族ですけれども、同じ氏族が存在して、今は違う民族であるけれどももともとは同じところから発したものだというような例が多々ございます。これが極めてアフリカ的な、あるいは事によると中央アジアまで含む、モンゴル帝国の例を出すまでもなく、こうした遊牧民族における大発展から消滅まで含めるそうした大きなダイナミズムをもたらす、そうした民族生成のあり方だと思います。それに比べますと東南アジアというのは、どういいますか、非常にちまちまと何かまとまっているように見えるんですね。このあたりがどうも、アジア的、というよりもさらに限定的に、東南アジアの特殊性かと思います。

西カリマンタンの民族間分業

カヤン(Kayan)	鉄製品の鍛造
ムマロー(Memaloh)	銀製装身具
ウキット(Ukit)	籐製かご製品
イバン(Iban)	綿かすり織物
(マレーMalay)	漁業、商業

私が調査を行っているボルネオ島の一部で西カリマンタンというインドネシアに属する州がありますけれども、そこでヴィクター・キングという人類学者が次のようなおもしろい話をしております。(スライド5)つまり、西カリマンタンにおける民族間の境界の維持というのは基本的に分業によってなっている。例えばカヤンと呼ばれる民族がありますけれども、これは鉄製品の鍛造を専らとしているといいますが、要するに得意としている。マローと呼ばれる民族集団は、銀製の装身具をつかって、これを近隣の民族集団に行商のかたちで売り歩いている。ウキットという民族に代表される狩猟採集民は、籐(ロタン)のかご製品に特化している。一方イバンというのは、綿かすり織物をボルネオの中で珍しくつくる民族としてよく知られているわけです。こうしたカヤ

ン、マロー、ウキット、イバンと呼ばれるような、山岳といいますが丘陵地帯にいる民族たちが、それぞれみずからの特化した民芸・工芸の技術を持って相互に交易にも携わり、しかもこれをもってみずからのアイデンティティとしているように、そうした分業による境界が成り立っていると論じております。この場合おもしろいのは、近くにマレー人も住んでいるわけですが、漁業を行いつつ、基本的には交易、トレードを行う民としての仲介的な存在になっている。カヤンであるとかマロー、ウキット、イバンという人々を、ある意味では上からといいますが、傘のようにまとめているのがこのマレー人の存在である。このような論じ方をしております。

スライドにボルネオの地図を出しておきましたが、西カリマンタンというのがこの辺ですね。(スライド6)ここに大きな川が見えるかと思えますけれども、この川はカプアス川で、論じられた4民族は大体この辺に住んでいる人たちです。イバンと呼ばれる人々はさらにマレーシア側の北西ボルネオ、つまりサラワク、さらには現在ではブルネイからサバにまでまたがって住んでおります。

私にながく研究対象としてきたのはこのイバンと呼ばれる人々ですけれども、ヴィクター・キングは、またイバンの生成についてもおもしろいことを言っております。イバンは、この辺に住んでいるほかの人々、農耕生産技術的には全く同じ水準の人々ですけれども、それと比べて社会的に大きな違いがある。つまり、ほかの人々は世襲の首長がおり、場合によってはかなりはっきりとした身分制度が確立している社会を形づくっている。それに対してイバンはどちらかというところ平等主義的で、世襲の首長あるいは身分制度はない。彼らは非常に個人主義的でばらばらともいえる社会的 ethos を持っている人々で、非常に自立心に富んだ人々である。さらに特徴的には、彼らは非常に急速な膨張的拡散移住を行なって、この150年から200年間にボルネオの西北部を制圧していった。この民族集団の生成に関してキングは、首長制と身分制を伴った非常に rigid な社会からの、何と申しますか、一種の逃散者、つまり、逃げ出して新たな平等的なコミュニティ、一種の共同体をつくらうとした人々を想定し、彼らがイバンの起源ではないかということ論じております。これは私も私としては独立に、のつもりなんですけれども同じような想像をしております、日本語ですが、書いたこともございます。キングの議論につけ加えることがあるとすれば、恐らくこうした身分制度を持った人々とマレー人との境界に生成した人々、つまり、大きな丘陵地域の人々と平地のマレー人との地域的境界の、どちらかというところ非常に交通の激しいところで、rigid な社会から逃げ出し、逃散し、さらにほかの人々を巻き込んで、それ自体単なる自然増ではなくて、ほかの民族の人々を巻き込むことによって増大してきた人々だというふうに考えております。こうなるとイバンという民族がそこにいるというよりも、それはもうイバン運動である。要するに200年間のある種の平等化運動の果てにイバンという人々が現在存在するのではないかというふうに考えられる。これは、たしかにあまり実証的な根拠のある話ではないんですが、現在のイバンの生活を見る限り、その諸特徴を非常にうまく説明できる仕方なんです。このように、民族として、現在イバンという名を持つ人々かつては名前はなかったわけですが、外から与えられ、そのうちにみずからもその名を使うことによって境界を強化してきた人々、その生成というのは、実は歴史過程において非常に特徴的な動機を示していると思います。それは、いわばコミュニティ以前の、ムーブメントからコミュニティへ転化していくような、そうしたものであったのではないかと思います。

こうしてみると、ほぼ常識ではありますが、民族というものを固定的に見ることは当然できませんし、すべてこうしたダイナミズムの中でとらえていくべきなんだろうと思います。もっともイバンの場合にはある程度こうしたことが言えるんですが、ほかの rigid な体制をもつ社会については、それこそ過去は全くわからない。現在このようにあるものはあるという言い方しかできないわけですね。その辺が恐らく東南アジアのこうした森に近いところに住んでいる比較的個々の人口の少ない集団の民族形成の、その境界維持のあり方だと思います。これは大草原のアフリカあるいは中央アジアの民族の民族境界のあり方とは大きく異なります。

民族学者としてはほとんどここで終わっても構わないのですが、民族というと、普通にはナショナリズムであるとか、あるいはナショナリズムではなくても、国民国家におけるエスニシティであるとか、民族紛争であるとか、あるいは多民族主義であると

か多文化主義であるとか、そういうもう少しリアルな話をしなくてはいけないと言われ
そうなので、一つだけ弁解を申しておきます。私個人はそうしたリアルな問題には一切
学問的な興味を持っておりません。簡単に言いますと、こうしたいわゆるリアル、括弧
つきの「リアル」な問題というのは、それ自体は言ってみれば民族学者の仕事ではない
のです。民族学というのは超ミクロと超マクロの両極をやっております。その中間は、
そのほかの人文社会諸科学が大いに活躍されるところであって、民族学者が生半可なこ
とを言っても、せいぜい二流の政治学、二流の経済学 あるいは三流ですか にな
るのが落ちですので、ここでは民族学者は分をわきまえなくてはいけないと思ってお
ります。

ただし、一つだけまたここでつけ加えておきます。nation と ethnos という概念の関
係についてです。これについては歴史学者が非常に細かく後づけをしておりますけれど
も、民族学者から見ると次のような印象を受けます。

西洋において nation というのは、まだその概念がなかったところの ethnos これ
はエスニシティ概念のもとになった語ですが というべき実態に、国民あるいは市民
を似せようとして作り上げた概念のように見える。しかし、そうした nation が一たん
でき上がってくると 要するに国民国家的なものができ上がると 、その作り上
げた nation において、まだどちらかというところ十分に組み込まれていない人々を指
すために、エスニシティなり少数民族なりといったそうした言葉で再措定していかなけ
ればいけないことになる。その再措定していった挙げ句の果ては、そうした ethnos 的
な集団は、みずからは ethnos 的なもの、 これは nation に対して ethnos と名づけ
られたわけですから そうした二次的な、二流の nation ではないと言い出す。つまり、
ここには ethnos に似せてつくった nation があらためて ethnos 概念を生み出し、その
概念範疇に分類された ethnos 集団がさらに nation を名乗りたがるという、 歴史的
にはもっと複雑なんですから 、単なる形式論理からいってもけっして易しくはな
い二重螺旋的な構造がある、と言えます。

このことはボルネオにおいてもしかりです。もう時間がありませんので手短に触れま
すけれども、マレーシアのサラワク州とサバ州、あるいは独立国となったブルネイ・ダ
ルサラーム国、このそれぞれにおいて このような日本国よりも小さな領域の中で
、それぞれ違う主権国家あるいは州政府権力のレベルによって、さまざまな民族カテ
ゴリーあるいは民族 classification の組みかえが行われております。そして、それぞ
れの集団が、どのような組みかえがみずからにとって一番都合がいいのかということをも
ちろん考えている。サバにおいても ここはマレー人の非常に少ないところですが
、例えばカダザンと呼ばれる土着の人々が、みずからがいかに土着の人間であ
るのかを主張してマレー人に対抗するというようなことがある。サラワクにおいては、
状況はすこし違いますが、ブキタンと呼ばれるかつての狩猟採集民族が住んでおります。
現在の人口は4・500人程度じゃないかと思えますけれども、これらの人々はほとん
ど全員がイバン語を流暢にしゃべり、しゃべっている限りはイバン人と区別がつかない。
通婚も行っております。純粹のブキタン人というのはほぼなくなったと考えていいと思
いますが、ブキタンという名前だけは残ってしまうように見える。それはサラワクの州
法の、これは土地法にかかわる非常にマイナーといいいますか、民族にかかわる法律では

ないんですけども、法令にサラワクのネイティブというものが列挙してあります。その中にブキタンという名前が存在するわけです。ですから、法律を変えない限りこのブキタンの人々はいなくなってもなおブキタンは残る。言ってみれば空集合としての民族集団というものが残るといようなことにもなるわけです。

そうしたさまざまな歴史的な contingency とそれに由来するパラドックスを含めて現在の民族のあり方は成り立っている。とにかくジェネシスの現実態というのはそういうものであるということで私の区切りとしたいと思います。(拍手)

司会 ありがとうございます。

(質疑の部分から)

内堀 境界というのは恐らく人間を超えた大地の問題だろうと思いますけれどもね。つまり民族集団の形成契機のようなことは人間的契機であるわけですが、それでも私が思っているのは、最終的にはそうした人間的な契機というものも、それこそ田中耕司さんの意味での自然的な、自然の容器の中にあるものだということです。ですから、やはり人間の動きというのは、草原の中でと熱帯雨林の中でとは違うので、それが最終的には当然民族集団の形成のあり方等々に拘束を持っていると私は考えております。ですから、どこに区切りがあるかというよりも、なだらかに勾配して、恐らくインドの北のあたりからなっていくのではないかと思います。まだ多々言いたいことはありますけれども、時間がありませんのでこれでよろしいでしょうか、所長。